The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伊勢おはらい町における「防災まちあるき」 : 門前町と行政によるアクションリサーチ
Author(s)	板井, 正斉; 池山, 敦; 佐伯, 篤史
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(2), p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65067
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

伊勢おはらい町における「防災まちあるき」

—門前町と行政によるアクションリサーチ—

板井正斉*・池山敦†・佐伯篤史‡

Town Walk at ISE-OHARAI Town as a Disaster Prevention

A case of collaboration between the local government and tourist spots near the shrine.

ITAI Masanari, IKEYAMA Atsushi, and SAEKI Atsushi

1. はじめに

本研究ノートは、科学研究費補助金・基盤研究 A「宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ（研究代表者稲場圭信・大阪大学）」(1)（以下、本科研）の一環として実施した伊勢市おはらい町での「防災まちあるき」について報告する。

2. 伊勢おはらい町の防災対策への取組

2.1 伊勢おはらい町と伊勢おはらい町会議

伊勢神宮・内宮の門前町として賑わうおはらい町は、内宮宇治橋前から、宇治浦田の交差点付近へと続くおはらい町通りの両側に広がる一帯を指す（図 1）。そのメインロードであるおはらい町通りは、南北に約 800m あり、東側を五十鈴川、西側を国道 23 号と並行している。伊勢地域独特の切妻・妻入りや、きざみ囲いの木造建築による土産物屋や飲食店などが軒を連ねており、近世のお伊勢参りを彷彿とさせる町並みである。年間来訪者は、

* 皇學館大学教育開発センター・准教授・itai@kogakkan-u.ac.jp
† 皇學館大学教育開発センター・助教・a-ikeyama@kogakkan-u.ac.jp
‡ 皇學館大学大学院修士課程神道学専攻 1 年・d2961002@stu.kogakkan-u.ac.jp

ほぼ内宮参拝者数と比定すると 5,793,374 人（2016 年）にのぼる[2]。

おはらい町を構成する今在家町・中之切町・浦田 1 丁目南側には、現在、約 100 店舗あり、それとともに約 260 世帯、約 600 名が居住している。そのことから「観光地・住宅地の二面性を持つ町」といえる[3]。

図 1　おはらい町周辺地図
（googlemap より筆者作成）

伊勢おはらい町会議は、「通り沿いに居住または商いをする人及び法人で組織する会」として 2016 年現在、62 会員となっている。活動目的は、規約第 3 条に次のとおり定められている。

> この団体は、伝統的な伊勢おはらい町を誇りとし、時代を超えて私たちがそのたたずまいを積極的に守り参拝客を真心こめてもてなし、安らぎや喜びを与えるとともに、私たちの子や孫が喜んで住まうことができるような、生き生きとした生活のにおいのするまちづくりを推進することを目的とする。[4]

伊勢おはらい町会議の発足は、1980 年の内宮門前町再開発会議まで遡る。当時は、1973 年の第 60 回式年遷宮を終えて、最も参拝者数が落ち込んできた時期でもあった。老舗和菓子店を中心とした内宮門前町再開発会議は、次回 1993 年第 61 回式年遷宮へ向けた浮揚策として、町並み再生のアクシ

ョンを次々としかけていく。行政や関係機関もそれに呼応する形で、1989 年には「伊勢市まちなみ保存条例」を策定し、基金も創設される。さらに 1992 年にはおはらい町通りの無電柱化が完了する。そして、迎えた 1993 年には、路面の石畳化とともに、「神恩感謝」をテーマとした「おかげ横丁」も開業した。所期の目的を果たした内宮門前町再開発会議は、1994 年に伊勢おはらい町会議と名称変更すると、餅つき大会や七夕祭、ライトアップイベントである伊勢ヨイ夜ナなどを実施してきた。2005 年には以下の「まちづくり宣言」をまとめている。

一　私たちは、この町に暮らすことを誇りとし、感謝して生活します。
一　私たちは、おはらい町の伝統的なたたずまいを積極的に守ります。
一　私たちは、参拝のお客さまを真心込めてもてなします。
一　私たちは、子々孫々まで喜んで住まうことができる、生き生きとした町をつくります。
一　私たちは、この町に集うすべての人の安心と安全を考えたまちづくりを目指します。(5)

前身の内宮門前町再開発会議が、ハード面での実績を積み上げてきたのに対して、名称改正後の伊勢おはらい町会議は、ソフト面での充実に活動をシフトしてきたといえる。

2.2 防災への取組

伊勢おはらい町会議による防災への取組は、1994 年以降ソフト面を重視した一連の活動の延長線上にも位置付けられる。それとともに、2013 年の第 62 回式年遷宮を前にして、2002 年以降、内宮参拝者数の増加も背景にある。2008 年におはらい町会議の会長に就任した前田世利子は、増加傾向の参拝者を迎えながら、町の安全・安心を検討する必要性を強く感じたことと、新規出店者を含めて会員が共通して活動できるテーマであることの二つの理由から、2009 年より 3 年間をかけて、伊勢市より「観光地における災害避難マニュアル作成事業（以下、マニュアル作成事業)」を受託した。マニュアル作成事業は、「災害対策マニュアル策定」と「情報解析」の大き

く 2 つの柱で構成された。

「災害対策マニュアル策定」では、マニュアル化を目的としつつ、その過程を「おはらい町防災学校」と位置づけて、「防災意識アップ」や「災害イメージの共有」、「改善策、対応策の検討」を進めた。おはらい町防災学校では、座学はもちろん、災害発生後の状況をイメージし、自分を主人公とした物語を作る「目黒巻きの体験」や、地域のイベントへ出張した「防災クイズ」、地域にある食材を使った「炊き出し体験ワークショップ」、さらに会員が子どもを預ける地域内の幼稚園と共催した引き取り訓練や、まちあるき、図上訓練（DIG）などワークショップ型で誰もが参加しやすいコンテンツが目立った。

「情報解析」では、おはらい町を訪れる観光客を対象にしたアンケート調査とともに、流入人口の調査もシミュレーションされた。流入人口の調査では、最大滞留人数を概算で 1 日の内宮参拝者数の 10%と結論づけた。調査年度の 2009 年の内宮参拝者数が、6,014,051 人であったことを参考にすると、単純に 1,647.7 人となる。また直近のピークとなった 2013 年の内宮参拝者数 8,849,738 人を参考にすると、2,424.6 人となる。

以上のおはらい町防災学校や、流入人口調査などを踏まえて、2012 年 2 月に『観光地における避難マニュアル　伊勢おはらい町編』が完成した。マニュアルの特徴としては、表紙の「住む人も来る人もみんな大切」というコピーに象徴されるとおり、観光地特有の避難想定という点である。また、「地震発生」「揺れがおさまる」「一時避難開始」「一時避難」「避難所開設」と発災直後から 3 日間を想定する中でも、「一時避難開始（～30 分）」「一時避難（～3 時間）」に特化された内容になっている。

マニュアル作成事業は、その作成に留まらず、避難訓練を実施することで、事業後も防災への取組が継続されてきた。表 1 にその概要を列記する。なお、2013 年度のみ第 62 回式年遷宮の年にあたり、例年以上の来訪者と繁忙のため実施を見送っている。

表 1　伊勢おはらい町会議の避難訓練実績

訓練日	内容	参加者数等
2011/9/15	町会・自主防災・消防団・幼稚園との連携	約 130 名
2012/11/6	地域との連携、他団体への協力依頼、EV 車の	約 100 名

	活用体験	
2015/3/12	避難訓練付き旅行商品（防災訓練体験クーポン付宿泊プラン）の開発	約 4 名のクーポン利用
2016/3/10	名古屋大学「Study Tour」の留学生との訓練。訓練後ワークショップ実施	約 80 名

継続した防災への取組は、おはらい町会議のエリアを超えて、内宮周辺の 39 店舗で構成する内宮エリア災害協力協議会の発足へとつながり、2016 年 5 月 10 日には、伊勢市と「災害時における来訪者及び住民等への応急生活物資供給等の協力に関する協定書」の締結にまで至っている。この協定は、災害発生時に応急生活物資になるうる店舗等の商品・備品類を来訪者や住民等へ円滑かつ計画的に提供していくことを目的としている。

今後も備蓄にもなる商品開発や、観光防災の旅行商品開発、外国人対応の誘導フラッグ作成など「防災活動を観光へつなげる」ことを目指している。

その一方で、これまでの取組から見えてきた課題は、以下の 3 点に集約される。まず第 1 は、門前町としての中核をなす伊勢神宮との具体的な連携が未知数である点をあげられる。地域住民や店舗が中心となり、行政との連携も事業委託や協定書締結を通じて深まっている。その表れとして避難マニュアルには、一時避難開始時と、一時避難時の二度にわたって「公共との連絡」が明記されている。しかしながら、伊勢神宮との連絡調整方法などは未だ検討されていない。最大滞留人数のシミュレーションでは、おはらい町エリアで 1,600 人～2,400 人と想定されたが、ここに内宮境内の滞留人数を含んでいない。少なくともその同数を推定して、発災時、おはらい町・内宮に約 3,200 人～4,800 人の対流が予想される。現状の避難マニュアルだけでの対応は不可能と思われる。なお、現在のところ、伊勢市の災害時指定避難所に伊勢神宮は含まれていない [(6)]。

第 2 に、避難訓練のリアリティがあげられる。観光地という特性上、完全に来訪者をシャットアウトした訓練は不可能であり、かつ意味をなさない。とはいえ、平時に多くの来訪者が観光を楽しんでいる中での避難訓練となることから、どうしても訓練参加者と来訪者との意識のズレを生じてしまう。ややもすると、訓練参加者側の意識も低くなりがちである。

第 3 に、行政内部での役割分担・連携のあり方があげられる。既存の行政組織の中で観光と防災は、それぞれの部署で縦割りに所管されるため、平時も非常時もその連携のあり方には工夫が必要となる。伊勢市の場合、伊勢おはらい町会議の防災事業については、観光部局で担当しており、必要に応じて防災部局へつなぐ形をとっている。しかしながら、非常時、庁内分担が変わることから、スムーズな情報共有も課題である。

3. 2016 年度防災まちあるきと避難訓練

3.1 経緯

今回、伊勢おはらい町会議と筆者らによる防災まちあるきの実施については、2016 年 5 月の内宮エリア災害協力協議会と伊勢市による応急生活物資供給等の協定を、筆者らがニュースで知ったことに端を発した。筆者は、伊勢おはらい町会議の関係者をよく存じ上げていたものの、防災への取組については全く理解していなかった。筆者は、ニュースを通じて伊勢神宮の門前町と行政との防災に関する協定であることに大変興味を持ち、あらためて 6 月にヒアリングをお願いした。その中で、伊勢おはらい町会議関係者に本科研についても関心をもってもらえたことから、2016 年度の避難訓練について協働することとなった。

3.2 防災まちあるきと避難訓練の概要

2017 年 3 月に実施した伊勢おはらい町防災まちあるきと避難訓練について、概要は表 2 のとおりである。当日の参加者は、筆者らスタッフを含めて 59 名となった。その内訳は、伊勢おはらい町会議会員、伊勢市役所職員をはじめ、伊勢市観光協会、伊勢市社会福祉協議会、いせてらす手話ガイド（ろう者含む)、NPO 法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター（車いす利用者含む）など、地元関係団体で構成された。それに加えて、前月に本科研で防災まちあるきを実施した大阪府泉大津市と、後述する太宰府市役所、太宰府天満宮から関係者にも参加いただいた。その他は、國學院大學・皇學館大学の学生と本科研メンバーであった。

今回の実施にあたり、特に工夫をした点が２点ある。まず 1 点目は、お

はらい町の北側に位置する猿田彦神社境内を会場にした。前章の最後にまとめた課題の一つである伊勢神宮との連携へ向けて、同地域に鎮座する他神社への活動認知を意図して、伊勢おはらい町会議より会場提供をお願いした。猿田彦神社は、会場を平時より地域活動やボーイスカウト活動の拠点として提供していたこともあり、快く協力を得たとともに、プログラムの傍聴を通じて、関心をもっていただけた。

2 点目として、伊勢おはらい町会議の先進的な防災取組を同地域の活動に留めず、幅広く展開することを意図して、門前町を持つ他自治体・神社である太宰府市役所防災安全課担当者と、太宰府天満宮神職の各 1 名をコメンテーターとしてお招きした。

3 点目として、従来の避難訓練の前に本科研でシステム開発した「災害救援マップ（http://www.respect.osaka-u.ac.jp/map/）」アプリを活用した防災まちあるきを組み合わせた [7]。

表 2　防災まちあるきと避難訓練の概要

実施日　2017 年 3 月 14 日（火）	
実施プログラム	
１０：００	受付開始　　猿田彦神社青少年館（２Ｆ）
１０：３０	レクチャー 前田世利子氏（伊勢おはらい町会議会長） 「伊勢おはらい町会議のこれまでの活動」
１１：３０	まち歩き（現場実験）・避難訓練説明
１２：００	まち歩き（現場実験）スタート 猿田彦神社→五十鈴公園→県営総合競技場体育館（サブ）→伊勢神宮（内宮）→宇治神社→おかげ横丁
１３：３０以降	避難訓練エリア配置
１４：００	発災・避難訓練スタート
１４：３０	避難誘導場所に集合・アンケート（伊勢おはらい町会議）
１４：４５	移動
１５：００	振り返り WS（猿田彦神社青少年館（２Ｆ）） 気になった点・今後へ向けた提案・専門者関係者コメントなど
１７：００	閉会

3.3 防災まちあるき

当日は、伊勢おはらい町会議会長の前田世利子氏に「伊勢おはらい町会議のこれまでの活動」と題してレクチャーいただいた後、防災まちあるきを実施した。防災まちあるきでは、参加者の属性をできるだけ均等に分散して約 10 人ずつで 4 つのグループに分けた。まちあるきポイントとして、①猿田彦神社をスタートし、②五十鈴公園、③県営総合競技場体育館（サブ）、④伊勢神宮（内宮）、⑤宇治神社をグループごとに回り、最後は⑥おかげ横丁をゴールとして設定した。①④⑤は、おはらい町周辺の神社。②③は、伊勢市の災害時指定避難所。⑥は、おはらい町内の最大滞留場所であり、防災まちあるき終了後、避難訓練のスタート地点である。

図 2　災救マップの入力状況

②③④⑤では、各グループにポイントの訓練用被災状況を災害救援マップへ入力してもらった（図 2）。入力項目は、被災状況（被災・要緊急支援・救援拠点・無事）、インフラの使用可否（電気・水道・ガス・通信）、避難者数、乳児数、妊婦数、病人数、負傷者数、要介護者数である。最後にポイントでのグループ集合写真を撮影し、投稿してもらった。

3.4 避難訓練

防災まちあるき後、おかげ横丁にてグループごとに昼食をとってもらい 14:00 の発災まで、あらかじめグループごとに指定したエリア A～D にて待

機した（図 3）。

14:00 に地震発生の放送が、防災無線から流れ、3 分後に避難開始の放送が入ると、伊勢おはらい町会議会員が、「誘導中　Please follow us.」と書かれた誘導旗を掲げて、声をかけながら指定されている一時避難所へ誘導した（画像 1）。おはらい通りの北側（浦田駐車場）と南側（内宮前）に 2 か所用意された一時避難所では、避難者名簿作成をかねてアンケートに答えてもらった。

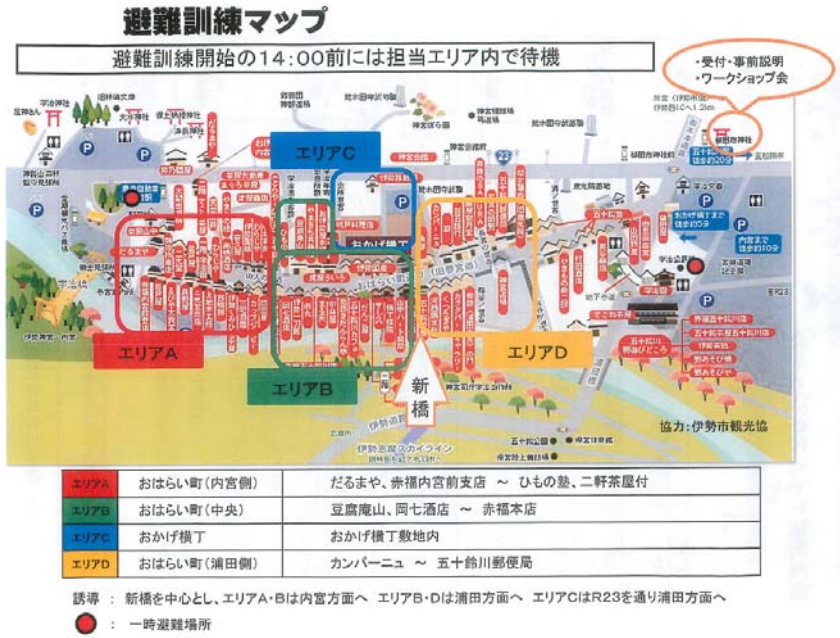

図 3　避難訓練マップ

画像 1　避難誘導中

4. アンケート結果と振り返りワークショップ

4.1 アンケート結果

一時避難所へ到着後、参加者へのアンケート調査を伊勢おはらい町会議が実施した。アンケートは一時避難所で用紙を配布し、自記式で行った。伊勢おはらい町会議のまとめた結果から、概要を抜粋すると次の通り。

回収数は 59 であった。属性として男性 64%、女性 34%で、一次避難先は浦田方面 53%、内宮方面 47%であった。参加者の年齢は、割合の多い順に 60 代以上 27%、40 代 24%、50 代 22%であり、来訪者 48%、勤務者 27%、住民 25%となった。

次に訓練についてのアンケート項目から、特徴的な結果を抽出すると、「①地震発生の放送（声）はきこえた」という設問について、「どちらとも（いえない）」が 42%で最も多く、「いいえ（32%）」「はい（26%）」となった。約 74%の参加者が聞こえないか、聞きづらい状況であったといえる。

また、「いいえ」と答えた方の半分以上が内宮方面だったことから、人通りの多さが影響していると推測できる。

「②誘導のプラカードが見えた」では、「はい（71%）」が最も多く、「いいえ（20%）」「どちらとも（いえない）（7%）」となった。約 7 割がプラカードを見ていることから視認性は高いといえる。

「③誘導員の声（マイク）が聞こえた」では、「いいえ（46%）」「はい（40%）」と、やや意見が割れたが、「いいえ」は内宮方面が多いことから、人通りの多さによっては声の誘導に限界があるのかもしれない。

アンケート結果を受けて、伊勢おはらい町会議は、「放送」と「誘導」について課題を整理している。まず「放送」について、実際の発災時にはボリュームが大きくなることと、揺れるという体感的な現象を伴うことから、発災の周知可能性は高くなると推測される。それでも内宮方面など人通りの多い場所などでの「聞こえない」を、「音」「音楽」などを工夫することで改善する必要がある。また「誘導」について、プラカードの視認性は高いものの、声（マイク）での誘導には限界があるため、常設の誘導サインや避難情報の掲示など、景観を損なわない形で考えなければならない [8]。

4.2 振り返りワークショップ

避難訓練後、再び猿田彦神社へ戻り、全体の振り返りワークショップを行った（画像 2）。ワークショップでは、ポストイットを使って各グループで 2 つのテーマ（①「もし、今日がその日だったら！？」②「その日までにできること」）について意見を出し合った後に、グループ発表で意見の共有をはかった。それぞれのテーマで出されたポストイットのテキストデータから結果をまとめる。なお、テキストデータは、KH Coder を使って分析した。また、引用したテキストデータは記載のままだが、一部（）で注記を加えた。

①「もし、今日がその日だったら！？」

最初のテーマは、今日の訓練が本番だったらどうだっただろうか、という振り返りから現状と課題の抽出を試みた。出されたポストイット数は 143 枚。KH Coder による総抽出語数は 1,597（733）、異なり語数は 447（333）であった（( ) 内は、助詞や助動詞など一般的な語を除いた分析対象数）。

頻出語を出現回数順に並べると表 3 になる（出現回数 2 以上）。最も多かった「避難」では、「避難先に行く経路がわからない」「たくさんの人があっちこっちに走り出し、スムーズな避難もできずパニック」「誘導で避難したけど何が起きたかわからなかった」など、避難の難しさについての指摘が目立った。その要因として「あの人の量（多さ）で避難はしたくない」とあるように、観光地としての盛況が避難時には一転課題となる。また、「外国人が多かったが避難できるのか？」といった特定の対象者への対応もあがった。そのような課題解決のヒントとして「避難かんばん（看板）あってもいい？」「避難場所等の看板が少ない」といった誘導方法に関する意見や、「とりあえず内宮に避難！！（お店には頼りず（づ）らい）」「避難すべき場所は伊勢神宮」など、避難場所への意見もあった。

表 3　①「もし、今日がその日だったら！？」頻出語一覧

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
避難	26	たくさん	3	訓練	2	頼る	2
人	24	スムーズ	3	建物	2		
誘導	16	火	3	見える	2		
多い	14	外国	3	行く	2		
場所	11	看板	3	参加	2		
逃げる	11	経路	3	時間	2		
放送	11	行動	3	自宅	2		
パニック	10	車	3	実際	2		
声	9	出る	3	集合	2		
聞こえる	9	大変	3	住民	2		
安全	8	地元	3	場	2		
思う	8	内宮	3	場合	2		
観光	6	落下	3	情報	2		
客	6	アナウンス	2	対応	2		
案内	5	カン	2	町	2		
災害	5	宇治橋	2	土地	2		
自分	5	音	2	道路	2		
風	5	可能	2	内容	2		
分かる	5	外	2	発生	2		
お客様	4	確保	2	聞く	2		
強い	4	旗	2	防災	2		
少ない	4	帰る	2	無線	2		
店	4	急ぐ	2	木造	2		
必要	4	居る	2	様子	2		

（KH Coder を使用して筆者作成）

②「その日までにできること」

次のテーマは、今後の訓練の改善策や、必要な備えについて意見の抽出

を試みた。出されたポストイット数は 131 枚。KH Coder による総抽出語数は 1,336（684）、異なり語数は 494（366）であった（() 内は、助詞や助動詞など一般的な語を除いた分析対象数）。

頻出語を出現回数順に並べると表 4 になる（出現回数 2 以上）。②においても最も多かった「避難」では、「もう少し大人数で避難訓練」「避難訓練は、もっと本格的に！」「来訪者参加型の避難訓練の実施」など、平時と非常時が同時に存在する訓練の状態から、できるだけ避難意識の高い参加者を増やすことへの意見が目についた。そのための改善策として、「景観にあう避難所、かんばんの設置」「店ポ（舗）店内に避難場所を掲示する」「デザイン性の高い避難看板」など避難誘導看板に関する意見が目立った。また、「避難先が分かるマップを作成」といった平時の店舗情報に加えて、非常時の避難情報を含めたマップのアイデアも出された。さらには、「観光客の年代に合わせた避難誘導計画」と来訪者の年齢を想定した意見も出された。

表 4　①「その日までにできること」頻出語一覧

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
避難	33	放送	4	見る	2	入れる	2
訓練	26	スピーカー	3	固定	2	複数	2
誘導	14	各店	3	工夫	2	分かる	2
場所	10	確認	3	行う	2	分ける	2
人	10	今日	3	講義	2	聞く	2
観光	9	災害	3	守る	2	方々	2
マップ	7	作成	3	手話	2	方法	2
声	7	増やす	3	従業	2	防ぐ	2
安全	6	町	3	準備	2	無線	2
案内	6	変える	3	初動	2	連	2
客	6	もう少し	2	常に	2		
逃げる	6	カン	2	神宮	2		
表示	6	スタッフ	2	人達	2		
防災	6	バン	2	水	2		
考える	5	マイク	2	設備	2		
参加	5	リーダー	2	先	2		
情報	5	意識	2	全員	2		
設置	5	外国	2	多く	2		
聞こえる	5	確保	2	体制	2		
パニック	4	活動	2	耐震	2		
看板	4	含む	2	地区	2		
住民	4	協力	2	地元	2		
地域	4	教育	2	徹底	2		
津波	4	景観	2	店	2		
道路	4	検討	2	伝える	2		

（KH Coder を使用して筆者作成）

画像 2　振り返りワークショップ

5. おわりに（小括と今後の課題）

門前町は、宗教施設との関係を強く持ちながら、観光としての集客力や対応力を高めることも求められている。今回取り上げた伊勢おはらい町は、まさに「門前町における観光防災」として先進的な取組を続けてきた。これまでの蓄積に学ぶとともに、そのノウハウを広く他地域の門前町に周知していくことが望ましい。

その一方で、解決するべき課題も明らかになりつつある。例えば今回の訓練やまちあるきを通じて見えてきた課題の一つに「誘導サイン」がある。門前町として日常の景観を壊さず、でも非常時の危機管理力を高めるという矛盾した条件を満たすサインのあり方が求められる。

本科研は、宗教施設を地域資源とした地域防災の向上を目的としながら、その手法としてワークショップを用いている。ワークショップの持つ「集合知」という効果を最大限に生かしながら、ノウハウの周知と課題解決ア

イデアの創出について、ひきつづきアクションリサーチを進めたい。

謝辞　本研究ノートを作成するにあたり、伊勢おはらい町会議会長の前田世利子氏、伊勢市役所産業観光部観光振興課主幹の中村洋氏から、ご指導・ご協力をいただきました。感謝いたします。

註

(1) https://relief-map.jimdo.com/　2017 年 7 月 10 日閲覧
(2) 「平成 28 年度伊勢市観光統計【資料編】」
http://www.city.ise.mie.jp/secure/41908/28siryouhen.pdf　2017 年 7 月 10 日閲覧
(3) 伊勢おはらい町会議「観光防災まちづくり　住む人も来る人もみんな大切」2017 年 3 月 14 日資料
(4) 伊勢おはらい町会議「観光防災まちづくり　住む人も来る人もみんな大切」2017 年 3 月 14 日資料
(5) 伊勢おはらい町会議「観光防災まちづくり　住む人も来る人もみんな大切」2017 年 3 月 14 日資料
(6) 伊勢市は、指定避難所、津波緊急避難所、要援護者避難所、自治会避難所を独自の避難所指定基準（避難所の安全度のランク）を設けて指定している。2017 年 7 月 10 日現在で、163 ヶ所。その内、22 か所は民間事業所等。
http://www.city.ise.mie.jp/11552.htm　2017 年 7 月 10 日閲覧
(7) 未来共生災害救援マップ（略称：災救マップ）は、全国の避難所および寺・神社・教会等の宗教施設データ約 30 万件を集積した日本最大級の災害救援・防災マップ。災救マップは、防災の取り組みを通して、自治体、自治会、学校、寺社・教会・宗教施設、NPO などによる平常時からのつながり、コミュニティつくりに寄与し、災害時には救援活動の情報プラットフォームとなることを目指している。http://www.respect.osaka-u.ac.jp/map/　2017 年 7 月 10 日閲覧
(8) 「伊勢おはらい町　避難訓練アンケート」

参考文献

宗教者災害支援連絡会 (編集), 蓑輪顕量, 稲場圭信, 黒﨑浩行,葛西賢太（責任編集）2016『災害支援ハンドブック: 宗教者の実践とその協働』春秋社。